



New network to connect donor siblings.

ドナーきょうだいを結びつける 新たなネットワーク

Interviewee

Dr. Rosanna Hertz

Q. 研究者としてのバックグラウンド、関心領域、これまでの研究内容について教えてください。

Northwestern University で社会学の博士号を取得し、社会学者として活動している。Harvard Medical School の精神科研究部門で2年間のポスドクフェローシップを経験した。現在は、Petrie-Flem Center 内の Harvard Law School と、スイスの Brocher Foundation でも仕事を得ている。

自分の仕事のキーワードは、仕事、家族、ジェンダー。このテーマについて数冊の本を出版した。

90年代の始め、選択的シングルマザーについて研究を始めた。それが発展して、known donor や unknown donor で妊娠出産した女性についての研究につながり、生殖の領域に関心を持つようになった。

それ以来、インターネット、生殖、健康、匿名性が交差する問題(より学際的な領域として)について論文を書いてきた。論文は、いろいろな雑誌にアクセプトされて世界中で参照されている。

次の研究につながる大きな発見は、‘Single by Chance, Mother by Choice’ のエビロークから得たものだった。インタビュ

ーした女性たちに電話をかけて、フォローアップを行い、その後、どのように人生を歩んでいるかを聞いた。パートナーを見つけた人は少なく、別の子供を産んだ女性たちが多かったことに驚いた。ある母親は、子供のドナーきょうだいに会う計画を話してくれた。以前にはドナーきょうだいについて考察していなかったのもとても驚いた。

一番新しい本は、Dr.Margaret Nelson と共著で出版した ‘Random Families’ だ。2014-2017年まで、National Science Foundation から助成金を受けた。助成金のお陰で、米国内の7箇所に移動してワールドワークを実施することができた。

Q. Random Families の研究の目的と方法、主要な Findings を教えてください。調査で、困難なことはありましたか？どのように対応しましたか。

ほとんどの場合、親と子供を同じタイミングで、別々にインタビューした。もし子供が、大学に通っているなどの理由で離れた場所にいる場合は、スカイプを使った。最終的に、百人以上にインタビューを実施した。

研究は、質的方法を用いた。それは自分の専門であり、習熟している方法だった。子供にインタビューをとる際には、施設内倫理委員会の許可を得た。子供たちには、インタビュー内容は、親に知られることはないけれども、もしインタビューの後、そのことについて親と話したければ、話してもいいと伝えた。

Facebook の、同じドナーから生まれた家族のネットワークのページを観察し、バーチャル民族誌も行なった。



主に困難だったのは、以下の点。

プロジェクトを始める前に、歴史的に大規模な DC(Donor Conception)家族がいることがわかっている場所を特定した。ボランティアで研究に参加してくれる人も多く、研究内容を他の半きょうだいと話し合えないように細心の注意を払った。DC の子供たちは、「DC で生まれた人と話をしたいのなら、ほかのドナーきょうだいに聞いてみてあげよう。OK なら、あなたに紹介することができるよ」とよく言ってくれる。彼らのネットワークは役に立ったが、匿名性を維持することが重要だった。

いろいろな年齢の子供にインタビューをするのが難しかった。特に 10-12 歳くらいの子供は、成熟度がかなり異なる。それぞれの対象者の成熟度に合わせるために、複数のインタビューガイドを作成した。

子供たちはインタビューを楽しんでいた。2 年後に、電子メールでカードを送ったとき、家族やドナーのネットワークについてアップデートする情報を返信してくれた。例えば、その後、5 人の半きょうだいを見つけた、など。書籍の後半では、このような、精子ドナーのネットワークに焦点を当てている。

読者が DC の歴史的経緯と DC で生まれた子供たちへのその後の影響を理解できるように、特定のネットワークをフォローアップするのが一番いいのではないかと考えている。たとえば、初期の DC では、ドナーきょうだいと出会うことは予期されていなかったが、2003 年以降、同じドナーから生まれた人々と出会う可能性があることが知られるようになり、これより後の世代の人々は、そのことをもっと期待するようになるだろう。

Q. 対象者の社会的属性に関して、一定の傾向はみられましたか？

一般的な傾向としては、技術の発展により、精子提供を利用する異性カップルが減少し、現在レズビアンやシングルマザーに受容されるようになっていて、ネットワークも、その変化を反映するようになってきている。不妊の男性が精子提供を利用することは今もあるが、ネットワークは、どのような人たちが不妊治療クリニックを利用しているかを反映するようになってきている。

それから、匿名ドナーを例外なく使っていた時代から、現在ではオープン・アイデンティティのドナーも選択可能になってきているという大きな変化がある。その結果、家族に関しては、研究によると、想定されるよりももっと大きな多様性がもたらされている。

誰がドナー・バンクにアクセスできるかに関して。利用した 43% のカップルが年収 10 万ドル以下の所得だった。しかし、購買力は、場所によって異なる。このことは、離れた場所に住むドナーきょうだいたちはなかなか会うことができないということを意味する。また、インタビュー・コホートのなかで、文化的人種的な多様性があり、ドナーきょうだいたちが定期的に会うのを難しくしている。

米国では、宗教的な人が DC を利用することはまれ。しかし、インタビューしたなかには、宗教的な家族もいた。(特にヘテロカップル)

助成金があったので、あまり知られていない、マイナーな州の辺鄙な場所に住む人たちにアクセスすることができた。



Q. ヘテロカップル、シングル女性、レズビアンカップルを比較すると、異なる点がありましたか？

それは研究の焦点ではなかったが、インタビューしたヘテロカップルには特権があった。それは、子供がDCで生まれたことを誰かに告げる必要がなかったから。それに対して、レズビアンやシングルマザーは、開示するしか選択肢がない。

親と子供にインタビューしたので、それはDCのことを開示している家族にしかインタビューしていないということ。グローバルな変化として、DCの子供たちにとって、その事実を知ることが重要だという認識が広がっている。それは、自分の起源を理解するということ。

主に二つの点に違いが見られた。

1. ヘテロカップルの家族に育てられた子供は、父親のことを、社会的父だとみなしていて、その事実を受容していた。
2. 一方の親と遺伝的繋がりが無いレズビアンカップルに育てられた子供は、双方の親とそれぞれ異なる関係を持つだろう。その関係性はヘテロカップルの場合より、もっと微妙なものになる。しかし、レズビアンカップルの子供たちは、いずれかの母親が自分にどのくらい似ているかを公然と話していた。

Q. Donor sibling との交流にもっとも積極的なのは、どのような人でしょうか？

これは人それぞれ。この領域で何年も研究してきて、5つのドナーきょうだいのネットワークを調査した。そして、参加者は、これらのネットワークによって得られるものについて様々な考えを持っていた。初期の頃には、拡大家族のようなもの作ることに焦点があった。例えば、ドナーきょうだいは、年齢と性別に従って並べられる。そのあと、これらのネットワークが与えてくれるものについて様々な考えが発展していく。ドナーきょうだいは、外見的特徴や病歴についてより多くの知見をもたらしてくれる。精子バンクはこれらについて最新の情報をくれることはない。

なぜ人々が互いを探すのかについての文献を幅広く調べると、初期の研究では、1) 他のドナーきょうだいを知りたいという好奇心のため。2) 特にシングルマザーの場合、子供にきょうだいを与えたいため。互いに親しくなる子供たちは、一人っ子であるか、一人親に育てられていることが多い。

Q. Donor sibling との交流は、匿名ドナーに会えない場合に、良いオルタナティブになり得るのでしょうか？

ドナー本人に会うことの代わりにはならないと思う。しかしそれは、第一に、補助的なものにはなりうるだろう。第二に、ドナーやドナーきょうだいを探すことを阻止する法的手段はない。これは自主的なプロセスなので、全ての人が行うわけではない。また、いつでも始めることができる。精子バンクは、ドナーきょうだいの潜在的な重要性に気づいてい



る。これらの探索は、少し前から行われるようになってきている。

母親は、大抵、ドナーきょうだいの探索を子供がまだ小さい時から始めることがある。それに対してドナーへのコンタクトは、法的には18歳以降に制限されている。ドナーきょうだいの存在は、父系親族とアイデンティティに関する問いに答えてくれる。しかしそれはドナー本人に会うことの代替にはならない。

ドナーきょうだいに会っても、ドナーに会うことには興味を持っていない子供たちもいた。ドナーきょうだいは、ドナー本人とは違った意味でのある種の父系親族を与えてくれる。ドナーきょうだいは似たような年齢だ。ドナーはきちんとした定位置を与えられていない。ドナーは外部の人間だ。

母親は、「父親(dad)」を探していないし、ドナーはその役割を引き受けるつもりもない。子供たちも、父親(dad)ではなく、「ドナー」という言葉を使うようになってきている。著書の中では、知り合いのドナー(known donors)を使用した家族については含めていないので、それについては、わからない。

Q. インタビューは、親と子供の双方に、別々に行ったということですが、親と子供の語りが異なっていたケースはありますか？

インタビューの中で、子供たちに、誕生の物語について尋ねた。(著書では‘inventing the donor and bending the self’の章で分析した)、そして彼らの親たちも、同じストーリーを話していた。自分にと

って重要な事実は、子供がどのように理解していたかということ。ストーリーは親と子の間で共同制作されるものだから。研究者が知りたかったのは、子供たちが自分の言葉で、何歳のときに、どのように理解したか、そしてその情報をどのように使ったかということだった。

子供たちは詳細までうまく説明することができた。親たちは、子供が学校でうまく説明できるようにストーリーを与えたいと思っていた。ヘテロの親を持つ子供たちは、早い段階で「自分自身を説明する」必要はないかもしれないが、レズビアンカップルやシングルマザーの子供たちはそれをする必要がある。

Q. 卵子提供についても、同様なネットワークは形成される可能性があるでしょうか。

そういうことはいつか出現する可能性がある。現在、卵を凍結保存して購入することができるが、これはまだ非常に新しいこと。

米国では、卵子のシェアプログラムがある。たとえば、1人のドナーが12個の卵を提供し、3人の女性に分けられる。これは、精子ドナーネットワークとは大きく異なる。

現在、凍結卵子を購入できるようになったので、精子ドナーのきょうだいのネットワークに似たような形で卵子ドナーのきょうだいのネットワークが出現する可能性があるが、全く同じではない。提供できる数に関する規制にもよるが、卵子の場合は9~12個になる可能性がある。



Q. 匿名ドナーは(子供にとって)有害ですか? Donor conception についてどのように規制すればよいのでしょうか。

子供にはドナーが誰であるかを知る権利がある。匿名ドナーが有害か?それは答えるのが難しい。一部の国では、知る権利がまだ認められていない。匿名性が妨げている。

家族の秘密を守り、開示しないことは、人々が DNA レジストリを使用している現在、もはや維持できない。人々は自分が誰であるかを知り、ドナーにコンタクトする能力を持っているべき。遺伝子が健康とアイデンティティにとって重要であると社会が信じている限り、子供たちは知る権利がある。

ドナーが知り合いの場合と匿名の場合では、かなり違う。ドナーが誰かがわかっている場合、子供はその人を想像するのに時間を費やすことはなく、家族とはまったく違った関係をその人との間に持つ可能性がある。

また、ドナーには、自分の配偶子から、子供が何人生まれたかを知る権利があると思う。現時点では、それらをドナーに通知する法的義務はない。

Q. その他、コメント。現在取り組んでいる研究、今後やりたい研究など。

現在、以下のことに取り組んでいる:

1) 世界的に母親になる時期が遅延していることにより、ドナー使用の有無にかかわらず、体外受精の利用が増えることになる。このことにまつわる研究プロジェクトを遂行している。プロジェクトの開始時期にパンデミックが重なったため、移動が制限され、完全に米国内で実施されることになる可能性が高い。

2) 配偶子提供に関する小規模なプロジェクト。受精卵を廃棄したくないが、レシピエントを見つけられない場合に、残った受精卵はどうか。これには、受精卵の移植や凍結保存など、クリニックやエージェントが提供しているサービスと提供していないサービス、そして女性が年齢を重ねるにつれて生殖過程をどのように理解するかなどの要素が複雑に絡み合っている。

3) 直近の 18 か月間は、シングルマザーに関する研究と、パンデミックが彼女たちの仕事に及ぼす影響に関する研究に軸足を移している。

(2022 年 1 月)

@YURI HIBINO



Rosanna Hertz [Link](#)

マサチューセッツ州にあるウェルズリー大学の教授を勤める。専門は、社会学、女性学、ジェンダー研究。

過去 25 年間、新しい家族形態の出現と、それらが親族関係の理解をどのように拡大するかに焦点を当ててきた。

著書では、精子提供を利用した 152 組の家族、10 才以上の子ども 154 名(10 歳-29 歳)と 212 名の親(32-85 歳、レズビアン、シングル女性、ヘテロ)、その他、計 388 人にインタビューを実施した。Dr. Margaret K. Nelson と共著で成果を発表。

研究成果:



Rosanna Hertz, Sociological Accounts of Donor Siblings Experiences: Their Importance for Self-Identity and for new Kinship Relations *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 2022. 19(4):1-14

Rosanna Hertz and Margaret K. Nelson, *Random Families: Genetic Strangers, Sperm Donor Siblings and the Creation of New Kin*. Copenhagen, New York: Oxford University Press; 2019.

Rosanna Hertz, *Single by Chance, Mothers by Choice: How Women are Choosing Parenthood without Marriage and Creating the New American Family*. Oxford University Press;2006

Hertz R, Nelson MK, Kramer W. Gendering gametes: The unequal contributions of sperm and egg donors. *Social Science and Medicine*. 2015,147:10-19.

Hertz R, Nelson MK, Kramer W. Donor conceived offspring conceive of the donor: the relevance of age, awareness, and family form. *Soc Sci Med*. 2013, 86:52-65.